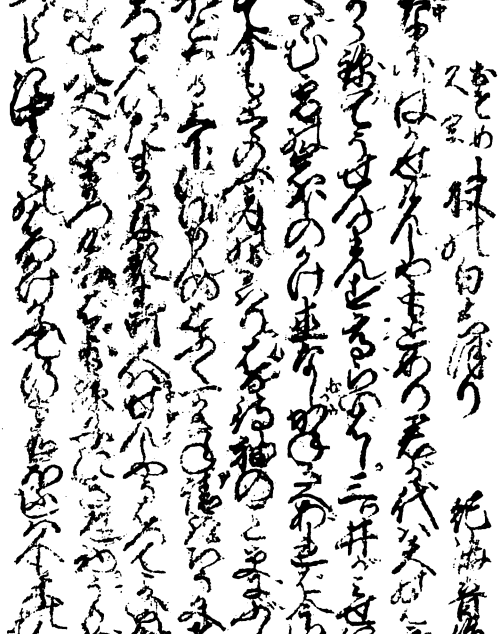
久松おそめ　袂の白しぼり

作者　紀海音

上の巻

地　難波風賢者も富めり君が代は。天の羽衣唐錦朝鮮綸子高麗橋。三井が見世に山たゝむ　フシ　雪の巌の掛直なし。地　銀さへあれば今云うて今も調ふ身のまはり。奉待袖の殊更に武士は角ある上下に。御紋の時服一重請取注文算盤の。倹約な顔も町人は。僭上張つてよい衆に。似せ八丈はしまつけな。婆も孫子も着衣始。うら珍しき中紅絹の八掛買うて行くも有り。法師は人も木の端と。云へば綸子の切端を。丸紮帯の末にては　フシ　めぐり逢うてふ主やこの。戀の日の出や。東堀。白歯も鑢ておそめとて。誰に思ひの種油。



締めて寝油二親の。光は有れど暗きより。暗がり好の豫言を知らぬ仲居や乳母連れて。嫁入小袖の模様より目は久松に行道の。三井が見世に立寄れば。地　乳母ち

よこ〳〵と走り入り。ハア藤七殿今日は。奇特とお宿にござんする。奥様からの御言傳。毎日こちへござつても模様がお氣に入らぬから。無駄足ひかす氣の毒などうで買はねばならぬ物。主をばそれへ遣りまする數々見せてあけすけに。地頼みますとの云付でアレお染様わざ〳〵と。お出なされました早に　オクリ　伴ひ〻内に入りにけり。地色若盛なる手代ども目を見合せて突きしろひ。瓦屋橋と聞及ぶ。油壺から取出した髪の艶から地合から。あの様な糯子が有らうなら中の島のお屋敷に。祝言前ぢや百本でも忽ち金にせうものと。見る物くはう仇思。フシ是頃の雫なり。お染は何の氣も付かず藤七に笑顔して。詞色品變る模様どもたび〳〵見せて貰へども。氣むつかしさに取紛れすけなう云うて戻せしが。地色今日は心も晴れやかさに慰みがてら染小袖。見ませうために參りしと。おめた所を手入らずとフシ世上に是をたふとがる。詞藤七は慇懃に。何よりかより御氣分の良いと聞くのがお頼もし。幸ひ今朝下りたる染物多くある中に。見るから粋と白綸子に五色の絲で縫付ける。地京大坂の菊合せ千歳の秋を八重桐が。舞臺衣裳の物好み。御氣に入らぬ事あらじと自慢顔して差出す。地色乳母や仲居は立ちかゝり。詞コレ〳〵是になされませ。是を召したら取成も八重桐に生寫し。地よかろ〳〵と囃せども久松一人餘所目して。詞淫奔らしい藝振にうつつて男こま付けて。京大坂に浮名立ち身の行末を八重桐が。地狂言にして貰うたら泣くであらうと呟くを。人は何とか白菊のお染も色に現はれて。菊の一夜を千夜とも頼みし仲は變らねど。うつろふ菊のあだ名こそ。フシいましやと搔遣れば。詞藤七は心得て。然らば是になされませ。廓に名をば咲かせたる花紫が物好きに。我名を衣に染色のおり縫ひ織紋織節の。地花の色繪のあしらひは黒人仲間によしといふ上なき模様候ふと。詞飾れど久松は。詞いや〳〵是も心得ぬ引手あまたの傾城の。地どう根性を似せ紫。とゝろ剝けたは見苦しと頽打赫め言ひ消せば。乳母仲居は腹立てて。詞こりや其處な者何をいふ。流行模様の善惡を。お主ちが辯口な。地默つて居やと叱れどもお染は暫し腑きて。詞いや久松の云やるのもさのみ無理とは思はれぬ。地色の變るも變らぬも絹には依れどさりながら。氣に懸るのは入らぬ物是も厭とて下に置く。地色藤七お染が脇顔をつく〳〵と打守り。扨むつかしい客人かな左程物好き有るならば。雛形書いて後よりも御目に掛けんさりながら。詞三井が棚に小袖は無きかと云はれんも口惜

しゝ。藏の内なる染模様。あら〳〵語り申さんと。地側なる帳面引き寄せて文章一々にこそ讀立てけれ。文章武藏野に一村。薄穂に出でて フシ乱れ合うたる小袖もあり フシ吉野初瀬の。花楓。今を盛りと見ゆるもあり。月の名所は。多けれど色は。様々信濃なる。る。姨捨山や更科の フシさやけき月は。是ぞこの。地砥草を分けてさしもけに。磨かれ出づる髄も有り。御簾の際より唐猫の。綱を扣へし女三の宮。姿を見そめて戀慕の闇に迷ふ柏木の。ゑもん流しの蹴鞠の庭。柳櫻に松楓。梅に鶯紅葉に鹿。竹に雀や花に蝶籠の八重菊鳶かづら。桐に鳳凰獅子に牡丹扇ながし砂ながし蟲づくし草づくし。小紋唐草ちらし紋。淺黄唐子に鶴鹿子。紫鹿子に皆人の ナホス心はけしの紅鹿子も候と。辯舌は足らうたり。言葉に花を咲かせつゝ。一時計語りしは フシけに面。白うぞ聞えける。ナホス地お染につこと打笑ひ色品多き其中に。一村薄打亂れ末に逢ふとは面白い。是にせうかと穂に出づる。フシ目元が直にすゝきなり。地色乳母や仲居は口々にこちとが目には美る内。丸めてみんな欲しけれど何を云うてもこれ〳〵に。緣遠なりし片端者。せめて五百か七百で四五十年も著るやうな。絲入縞か拔紬。フシ欲しい事ぢやと打笑ふ。地色藤七領き合點して。成程成程それもある取なし賴む追從に。錢のあるなし知らねどもさあらばこなたへこなたへと太物見世へ行く水のザクリ跡にはへ濡の差向ひ。地色お染はあたり見廻して久松が手をとらへ。コレ腹立さうな顏付を。なぜにしやると凭れ寄る。膝をずつと立退いて。歌嫁入衣裳を見に黄八丈。しかも心はとび八丈で。口に馝斗目と云ひもぢらせど フシらしやもない事。云はしやりんすな。つむぎ騙そと云ふ心かと。ナホスフシ振り切る袖を引止め。地色そんな小癪な當言を俄に誰に習やつた。詞茶屋新町へ折々に稽古にとやら人が云ふ。地あた鈍らしと睨めども。久松猶も傍目して。歌純子枕に二人がつひに。ぬめ幻の世の中と。物が云はすぞ フシ哀なる。ナホス地色お染は暫し思案してやうやうと今合點がいた。嫁入小袖を買はんため來たとのそこの腹立よ。何樂しみに其やうな榮耀な心を持つものぞ。憂き身を泣いて夜寳と寢て居る故にかゝ様の。詞お氣に懸けられさま〴〵の御意見の上此金を。枕元に差置いてさもしいやうな物なれど。死なで叶はぬ時節にも命を延ぶる妙藥ぞ。大事にかけて片時も必ず肌身を放すなと。地涙ながらのお詞に心が付いて如何様に。そなたの衣裳調へて姿の花を見るならば。氣合もとんと宜から

うと勇み勇んで來たものを。愛想盡かしなすね言葉 スエテ 憎や。つらやと。かこつ。にぞ。地 久松はつと差腑き。詞 誤りました拜みます。地 もう御堪忍遊ばせと手を取交し面白う。フシ 成りかよりたる眞中へ。地色 皆が戻れば久松はこれ藤七殿。詞 わしも正月小袖の加賀の諸白がより羽二重の。フシ 御召小紋が打とけて藍水松茶にも致さうか。地 氣遣なしに現銀と小判ぐわらりと投出せば。地色 乳母や仲居は聲々に何共是は呑込まぬ。詞 お主が何で此金を是程は持つてぞと。地 口々に咎むれば久松打笑ひ。詞 イヤ是は江戸の兄貴が所務分。今朝程飛脚に請取つた銀は有切こなた衆も。地 目に入つた物何なりと御用にたつと大氣なる。詞 も戀の口塞げ思案もなしの女子ども。夢か誠か久松殿顏もふく〳〵福の神。年の内から若惠比須厭面に溜る水淺黄。巾廣帶で品やらば脇から腹を抱帶。はんなりとした紫の帽子びら〳〵風吹に。這ひまくやうに十兩の。金もわが身も暇乞ひ東 オクリ を へ差して立歸る。地色 道二三町。過ぎけるが二人は何か咲いて。お染は跡へ振返りまだ日が高いそなた衆は。座摩の內にて淨瑠璃を十段計聞いて居や。久松連れてわしは又法印樣に來る春の。年八卦をば見てもらをこちへ〳〵と立戻る。跡先知らぬ乳母仲居慾から萬領いて。フシ 合點行かねど行く袖や。地色 お染久松しよぎ〳〵と扨もよい首尾上の首尾。戯ひ口には叔母もよし叔父は猶よし一門は。片腕程の綱と聞く渡邊筋の へ其そこに。地色 表屋ながらトや算見通しの法印として。失物盜人走り者扨は相場の高下迄。合ふのも不思議合はぬのも不思議〳〵と云ひ囃す。旦那々々の竈秡月待日待代待手。文字ふつゝかに祈禱札春の事迄片付けて。嘉例に伊勢へ年籠り。夜舟にのりの旅脚絆供の茂吉が鍬箱。大事にかけよ女房ども本尊々々のお鏡も。三か月樣のお供も必ず〳〵忘りやんな。詞 ソレ〳〵おれも忘れて居た。見れば最前油屋から長長とした文が來た。若し久松めが不埒など致せしとある付居物參する門出故。わざと隱し居らるゝか。地色 氣遣はしやと辱ぬれば女房え知らぬ顏付に。詞 悅ばしやんせさうぢやない。久松殿のあんまりと奉公振りがよい故に。仕着せの外に龍紋の帶遣すとの御知らせ。地色 ほんに其文見せうものつい引裂いてとあひしらふ。詞 法印悅び打頷き。褒美の帶は龍門の瀧に噓へて立身を。地 致せと有るのお諭。吉左右〳〵滿足なよう留守しやれ追付けて。目出度う春の初夢は。五日の晩ぞ樂しみやと オクリ 戯れへながら立出づる。地色 女房は未だ門口に跡見送りて居る所へ。

久松お染いそ〳〵と笑顔作りて入來れば。なうお久しやと計にて フシやがて内にぞ伴ひける。地色 二人は戀の中宿に日本一の首尾なれど。流石それとも云ひ兼ねて叔父坊様は留守さうな。定めて參宮でござんしよと詞跡先奥口や。二階なんどへ目も遣るも フシ責辮の夢の場取なり。地 女房は會釋して。詞 成程主は伊勢の留守。けぶたい者も無い大事の事ぢやとつくりと。地 互に談合しめ合うて又締め合うて締め合うて。謀合せてござんせと挨拶すれば兩人は。さても粋かなめだかかないや申しお内儀様。詞 なじみもないに淫奔な娘と思うてござんしよと。地 さしうつぶけば何のいの。若い時には有る習ひ氣をはつたりと持たしやんせ。今日よりしては旅他國案じたも善し案じぬも。行く先々に鬼はない弱い心を持つまいと。力つくれば久松は。合點の行かぬ御挨拶惜う思さぬお心に。身の行末の事迄を思ひやつての事なれど。そこらは二段奥の間でちよつと話し、足早に。去なねばわしよりお染様内のお首尾がわるいのに。通つたやうでどこやらが未だおぼこにござんすと。しらけて云へば女房はわしが詞の不思議なより。こなたの心がいぶかしい。詞 内方へとて足ぶみのならぬ首尾にて出て來たる。地 こな様方にあらずやと語れば二人はぎよつとして。詞 何ぢや内へは去なれぬとは。地 斯うした事が知れたかと 顔ひ出すを押鎖め。地色 女房小聲に云ふやうは。おふくろ様より最前に。コレ此文を遺された。讀みます程に聞かしやんせ。詞 親心にはいつ迄も童々と思ひの外。いつよりしてか久松とくさり合うたる中々を。無理に放さば淺ましき浮世の夢や見るらんと。案じ過しの數々は。筆にも盡きず候なり。地 斯くとは知らで嫁入の日取を急ぐ父親の。詞 突詰めた氣につゆ程も見付けられてはそもやそも。並大抵の事あらじ同じ内には置かれじと。思ふ心の一つからそれとは云はで賺し出し。路の遣ひの事なども心を付けて遣せし。外へ行かん所もなしそこ御許へ參るべし。叔父御の手前はよきやうに取成し云うていづくにも。かくまへ置いて給へかし月日も經つて言入の。緣だに切れて候はゞ詫事たてゝ添はさうと。地 母が心を云ひ聞かせ若氣短氣の出ぬやうに。くれ〴〵賴む フシ言の葉を。地 お染聞くより泣出しあらはづかしや面目なや。さぞやお腹の立たうのに末迄の親の慈悲。背かぬ様に此上はお前の情でいづくにも。立ち忍ばせて下されと。二人は左右に取付いて 身もだえしてぞびにける。地色 女房も涙ぐみ。ヲヽ尤やフシことわりや。地色 わしが思

案をして置いた。あたりほとりの日も多く矣にはどうも置きにくい。詞京大佛の煙管屋にひとりの姉が居られます。一先あれへ遣りませう一年半年ござつても。御遠慮の有る所ぢやない姉への文もさきにから。認めて置きました是をば持つて一足も。地早や日が暮れる出さしやんせ八軒屋から乗合の。船で風などひくまいぞ着いたとあるの便をば。早速見せて下されとそゝり立つれば二人もまた。泪はあれど心には一所にゐるが年月に。願ふところと嬉しさに心も空に氣も空に。暇乞さへそこ〳〵に走り出でしが。立戻り。詞夜船も只は乗せまいが其段はどうしましよ。ハテ商人のやうにもない銀で兩換なされいの。サア其銀がござんせぬ。ヤア何と云はしやる御文には。路のつかひも遣るとぢやが。但し忘れてござつたか。イヤ其銀は絹買うて乳母や仲居に帶帽子。地買うてやつたと云ひさして二人は。下に泣き伏しぬ。興醒め果てゝ女房は恨めしげなる聲を上げ。詞いかに年端が行かぬとて戀する心も持ちながら。餘仇おろそかにせぬものとは今お二人の身の上ぞや。油屋殿が長者でも女房のまゝに金銀の。ならぬは町の習はしよ。地子ゆゑの闇にどの樣なせつない事で調うた。銀やら知らでうは〳〵と其浮ついたお心では。今日より明日が覺束ない京三界へやりまして。浮つらき名を立てられても賴まれがひも有りやせん。若い同士の思込一過は野でも山にても。辨へなしに面白い世渡惡しく物事が。儘にならねば不圖したる恨みつらみに尼となり。青道心の破衣別れ〳〵に成るものと。例を云ふも御意見も跡になつたる悔しさと。スエチ叱りつ泣いつ口說きしが。中にて心を取直し上り詰めたる逸り氣に。詞麁相があらばお袋へ言譯もなしよしなしと。抱き起してコレ〳〵〳〵。案ずる事はちつともない外には人も知らぬから。一先内へ去なしやんせお袋樣と私が心二つの才覺を文で知らせて心よう。地添はする樣に成しますと騙し賺せば流石には。十九や廿に未だ足らぬ。當の花の梅櫻フシ盛り待つ木に立戻る。地色乳母や仲居は内に入り日が暮れうかと案じたに。サアサア早うお歸りと急ぐを幾會に女房も。そゝめき立つて門送りさらばゐ〳〵暇乞。逢ふ戀イヽヤ逢はぬ戀。時分柄とて掛乞ひも心せはしき　三段へ暮の鐘。

中の巻

地思ふ事なづな〳〵とこたまよび。春調へて門松も物もうの聲聞き覺え。顏も覺えて見通しの。法印御禮方々でフシご

ざりまするとと行過ぐる。地色油屋の内よりも少女子一人走り出で。申し〳〵法印様。詞頼みまし度い事有りとてお袋様やお染様。今朝から待つてござんした。暫くお這入りなされませ。ハア御用とは何であろ。お盃なら春永にとお斷をば云うてたも。イエ〳〵さうぢやござんすまい。地ちよつと〳〵と引連れて小座敷へにこそ通しけれ。地色母やお染は立出でて先づ以てお久しや。目出度い春の壽も。又御參宮の悦に人でも上げます筈なるを。詞店卸の何のとて。主にも寺のお禮さへ今日勤めらるやうな事。地御無沙汰のみに過ぎましたヤレ蓬萊よ銚子よと下女を散して近々と法印に差向ひ。詞お前も御存じ有る通りお染が嫁入致すのも。早や近々に成りまして。親父一人は悦べどもあの子は厭ぢや〳〵とて。地湯水も呑まず居まするを見てゐる母が心底を。御推量して下さりませ。とあつて今又變改の談合などに乘るやうな。旦那殿ではなけれども。詞護摩の牛王ながら取所。お頼み申すは爰の事。音に聞えた辯舌にて滅多無性に相性が。悪い〳〵と云消して氣に懸けさせて給はらば。其尾に付いて色品のあるまいものとも思はれぬ。地色二世と豫たる夫をば騙すと云ふも子が可愛さ。お話し申すも恥しとフシ袂を顔に押し當つる。地色法印は打笑ひ何より以つてお易い事。詞左樣なる儀は一日に。五十三十頼まるゝ皆此方の商賣なり。地燃杭に迄昨晩は丁字頭が立つたのは。是であつたと請合へば。覺えず知らずにつたりと。笑ふ子よりも見る親の。フシ心ぞ春の景色なる。地色折節亭主太郎兵衛は金持氣質目に立たぬ。袴持たせて一悦べどもあの子は厭ぢや〳〵とて。地湯水も呑まず居まするを見てゐる母が心底を。御推量して下さりませ。とあつて今又變改の談合などに乘るやうな。旦那殿ではなけれども。詞護摩の牛王ながら取所。お頼み申すは爰の事。音に聞えた辯舌にて滅多無性に相性が。悪い〳〵と云消して氣に懸けさせて給はらば。其尾に付いて色品のあるまいものとも思はれぬ。地色二世と豫たる夫をば騙すと云ふも子が可愛さ。お話し申すも恥しとフシ袂を顔に押し當つる。地色法印は打笑ひ何より以つてお易い事。詞左樣なる儀は一日に。五十三十頼まるゝ皆此方の商賣なり。地燃杭に迄昨晩は丁字頭が立つたのは。是であつたと請合へば。覺えず知らずに

りやお染も起きてゐる。顔持ちなどもきつう良い。地水垢離取るが今日七日就いては先程法印様。是へ御入りありし故お染を側へ呼出して。此子が今年の吉凶を見て給はれと頼んだりや。詞算木を出し懇に半時ばかり考へて。以ての外なる顔付して御笑止な儀は御息女に。大災難が出來ました。此度の祝言が悪縁なるを無理やりに。取り繕ふが曲事とて結ぶの神の御咎め。神々達の仲間へも觸が廻つて有る故に。祈禱も藥も手が屈かぬ片時も早く此事を。止めよ〳〵と御意見有る鬼や角思ひ合するに。詞法印様はやうやうと夜前伊勢から御下向。三日が内は神明の乘移つてござると聞く。立願かけた私に示し給ふと有難く。地はつとお受け申すとはや。娘が氣合良うなつて常より機嫌うき〳〵と。まだ樣々の不思議な事あなたへ直に御聞きと。眞顔作るも親

心。地色太郎兵衛つく〳〵聞屆け合點の行かぬ氣色して。神の利生は知らねども元三大師の御籤には。詞慥によいと上つたる。佛を破る罰とても當る所は只一人。疑はうなら法印殿。慮外な申分なれど違ひはせぬかま一算。地只管頼めば懐より算木取出し置き並べ。暫し頭を打振つて。詞フ、ウ。一德の水青陽の神木の氣を養うて共にり三の火を育つ。生家の油何時迄も盡くる事なく金銀は。子に子を產んで千年も上々吉の夫婦合。地あら目出度やと占ふに。お染は顏の色變り母は覺えず聲を上げ。詞コレそこな法印殿。折角人に頼まれた大事の算をぐど〳〵と。置直すとは御卑怯な。見通殿と持囃す譽が今から廢るぞや。地お名が惜しくば何時迄も初めの通におつしやれい。是なう〳〵とあせれども法印騒ぐ氣色なく。詞如何樣酒といふものは諸事萬端を仕損ふ。一杯機嫌でうか〳〵と初手に置いたは町内の。鍛冶屋の後家と水汲の五介が中を取違へ。地そこで水火の大悪縁元來拙者が生れ付き。フシ阿房印ぢやと嘲笑ふ。地色母はいよ〳〵腹を立て。詞イヤ〳〵さうは云はすまい。地無理は三度ぢや置直しや。サア見よ〳〵と立寄るを太郎兵衛は押隔て。法印の側へにじり寄り。詞驚入つた御名人。誠に八卦占形は人を助くる道なれば。曲つた氣ではならぬ筈流石以前はお侍。例へば一家一門が果報引出す事にても。地色非道に一味致さぬと坐つたこなたの御所存と。身共が思案と比ぶれば割符より猶合ひまする。とてもの事に今一色。お尋ね申す事がある。詞金銀出入の店卸し。昨日帳面しむる時十兩程の不足をば。大商賣の中なれば帳の付落掛方の。思ひ忘れもある事と其分にしてしまひしが。其盜手が今日は大方に知れました。地同類の義が覺束ない一算頼むと云ひければ。地色法印はつと算木をばそこ〳〵に置き並べ。詞ハテあぢな事此金は。人間は取りませぬ。ム、さうであろ〳〵。主をくらます人でなし人間ならぬ筈の事。シテ同類は見えませぬか。イヤ何とお聞き有る人間業でないからは同類のある筈はない。貴殿のけたい當年は大煩ひか大損を。なさるゝ星に當れども。年頃日頃の御信心天に通じて纏かなる。地金子に轉じ替へ給ふ守り本尊の御方便。必ず詮議御無用と云はせも果てずイヤこれ〳〵。詞譽め損ひが仕る。盜んだ奴は人も人取り分けて御坊の甥。證據を御目に掛けうかと久松を引出し。おのれ心に覺え有ろ。高津の坂をおりる時風に吹かれてちらほらと。あぢな身振りをしをる故心を付けて見て置いた。地其下着出せ見せぬかと込付けられ

て久松は。うぢ〳〵するを無理やりに。肩脱がすれば花やかな。浅黄小袖の引かへし フシ 見る目もいとゞ笑止なり。地色 太郎兵衛きつと睨み付け。詞 さて〳〵不敵な丁稚めかな。盗んで着るとは知らずして傍輩どもが云はうには。年季重ねし者どもには日野や紬の麁物して。久松づれに何事を召さると主を恨み出し。不奉公すりや身代の歪に成らうも知れぬ事。地 憎いと云うて上のないいたづら者と傍にある。箒押取りさん〳〵に肩背厭はず叩けども。叔父は餘所見て扱はず下女もこはがり寄付かねば。お染は見兼ね驅寄るを母はうしろへ引戻し。父に色目を知らせじと立塞がれば押のけて。行かんとするを取り留め。競合ふ内も三ツ五ツ。尚飽足らず振上ぐる。箒に母は取付いてむかつにござる旦那殿。詞 小袖ひとつを着たるとて盗みしたとも云はれまい。地 主ならねども親も有る。アレれつきとした叔父御から。して遣したとあるならば。其返答がむつかしかろ。よし盗んだにしてからが纏の金ではござらぬか。春の初めにいま〳〵しい取分けお染が顔持もたつた今迄よかつたに。騷ぎに氣をば取りのぼし又ぞや氣色悪さうな。たとへ千兩萬兩にも娘が命は買はれまい。祈禱の代に遣つたとも思うて堪忍して下され。法印殿も胴慾な盗人でない久松が。打擲かるゝをまぢ〳〵と見てゐる所ぢやござるまい。叔父様がひに言譯の仕様もやうも有らうこと。すべに依つたら私が同類ぢやとも云つてやろ。盗の主にもなるわいの。思案を付けて給はれと フシ 片手を。上げて拜みける。詞 法印言葉押鎮め。御麁相仰せられますな。外より云うて濟まうならお前の智惠を借らねども。何の默つて居りませう。何云はうにも慥なる證據を取られし上なれば。盗人の名は消えませぬ。久松おのれもよつく聞け。身が熱いとて狼狽て。同類呼はりなんどして必ず外を損ふな。斯うなる筈と諦めてお主の杖の下に死ね。親方殿も隨分と力の限り打たつしやれ。地色 さら〳〵以つて此方にお恨みとては申さぬと フシ せかぬも聲は震ひけり。地色 太郎兵衛箒をからりと捨て。とつくと坐つて。詞 法印殿さりとては。嬉しいこなたの御心底。あけて云はねど心には戴いてをります。地色 子も同然の久松に盗人の名を付けられて。さぞ口惜しうござらうが。僅の金に出來心さして恥にて恥ならず。詞 世間にはまだ大それた横着者が居ります。同行中に使はるゝ久松程な丁稚めが。主の娘をそゝなかし嫁入するのをうるさがり。地 うつら〳〵と煩ふに母親は只一概に。子の可愛に絆されて。浮名誹

も顧みず。地よしない巧事を云ひ。悪智恵付けるも父親が知らぬと思ふ愚かやな。詞とくより合點しながらも世間と義理にからまれて。見す〳〵死ぬるを見るとても結納を取つた先様へ。變改などはならぬ事。地色意見をすれば知るになる知りながら又嫁入すは。婿にかづける様なもの例を以て云はうなら。詞値千兩貳兩の茶入茶碗に瑕有るを。隱して賣るは掏摸同然。知らねばこちに咎もなく買て人もさのみ恨まじと。地色せめて心の取置きに思合せて久松を。打擲したも同類を知つても知らぬ意見の杖。打付くる手もわな〳〵と苦しき老の所存をば。推量あつて久松が重ねて盗みせぬやうに。御意見頼み存すると涙を隱す目の内に。親子の顔をつれ〳〵と。フシ守るも流石妬けなり。地色法印やがて久松を膝元へ引寄せて。天命知らず罰當りめ。詞たとへ壹錢半錢でも目を掠むるは横道者。況んや以つて是がまあ並體の盗人か。其不敵なる性根から叔父が所へのさ〳〵と。地盗物をば抱へて來て隱してくれよと頼みしな。女房はどこしも當分の義理に心が弱うして。請合ひながら兎や角とてにはの違ふ事有りしは。此法印が神明の加護に預る身の仕合。若しさもなくは今日は非道仲間に入れられて。當事苦口云はれても何と返答うつべきぞ。詞夜前其儀を聞くとはや胸に早鐘つきたれど。飾の内は面々が身祝をこそ致すなれ。五日三日遅いとてさのみ麁相も有るまいに。注連過ぎてから呼付けて折檻せんと思うたる。地所存が今で跡になりお主の杖を身に負うて。目の前叩き殺されても。言分の無い汝をば。まだ御不便が失さらずして意見を頼むなんどとの。慈悲なせつなきお詞は。犬猫にてもとつくりと耳の底へは應へる筈。長う云ふには及ばぬ事幸ひ牛王を持合す。今迄の儀を改めて何たる人が勤むるとも。ふつ〳〵盗みせまいとの血判をして見せませと。小刀を添へて差出せば。地色久松聲を打震ひ盗みは成程しますまい。血判は許して下されと拔差ならぬ中にさへ。戀の錨に繋がれて フシ離れ。離なく見えにけり。地色法印きつと氣色を變へ。詞扨々しぶとい丁稚めかな。汝は最早此坊主が。以前の武士を忘れたか。今長袖になればとて。是しきの儀を言掛りせぬとて後へ寄るものか。地是非厭ならば此小刀。喉笛に突込むと小腕うしろへ捩上げて。どうぢや〳〵と突つかくれば。詞アイ〳〵成程致します實正するか。アイ〳〵と。地こちらは首肯きやあちらなる。お染は厭ぢや〳〵とて。かぶり振る〳〵ふる涙。泣音を母は打掛の下に隱して押附けて。早まらしやるな

法印様。憎くば打ちも擲きもし。御意見ならば幾重にも騙し賺すが宜い筈を刄物を持つて無理やりな。それや胴慾と云ふものよ。牛王とやらは恐しい血判を捺して違ゆれば。罰が當つて死ぬるといふ假令松心をば。持直さうと思ふとも。盜仲間が聞きやせまい。死なば一所と固めたる牛王に判も捺してあろ。そちらの罰が當らずばこちらの罰を被りて。若し久松が死んだらば同類も亦死ぬるであろ。跡に殘つた親叔父が老木の春を慰めの。花とて何を眺むべき死んで浮名を流すのと。生きて波風騷ぐのと思ひ比べて見たがよい。人の誹も嘲も七十五日過ぎぬれば。止むとこそ聞け珍しき顏をも活けて見るならば。目出度いなどと悅ばん死なせて後に何方で。逢うて嬉しと思ふべき。例へば指が汚いとて。切つては捨てぬと云ふものを一人の甥を殺さんとは。大賊の身もせぬ事ぞ衣着ながら無慙なる。人心やと氣息まきし フシ覺えず。知らず。泣出す。地色 至極に詰り法印は。さすが持つ手も弱々と。フシ暫ためらひ居たりけり。地色 太郎兵衛近く立寄りて。詞 御眞實なる意見故。得心顏を見屆けてさつぱりと氣が霽れました。牛王に判を据ゑたらば盜人といふ惡名が。其身一代剝されまい。地 さう極れば此内の家來にしては使はれぬ。暇を遣らば世間から太郎兵衛程の身代にて。僅の銀で久松を追出したとは心得ぬ。いたづら事ぢやあるまいか如何か斯うかと跡もなき。取沙汰などをせられては御苦勞賴んだ甲斐がない。詞 元來彼奴が生付惡所狂ひをする樣な。性根は曾て下けぬやつ藪入前に成りたれば。奉公ぶりがよいなどと親へ潛上云はんため。地 孝行からの出來心奥賴もしき所有り。恥と思はで何時迄もよく奉公を勤めよと。ほや〳〵云へば面々も少し落着く顏形。牛王も元の袖に入れ小刀も鞘に納まつた。フシ御代の春とぞ祝ひける。地色 太郎兵衛重ねて慇懃に。まづ以つて法印樣。年の始に樣々の御世話ばかりを掛けました。お禮は參つて申すべし是が佳例のお初穗と。地 懷よりも一包扇に乘せて差出せば。あつとばかりに挨拶も。出兼ね云ひ兼ね堪へ兼ねて。金の脈とる心さへ。泣く。〳〵我家へ 三重 へ歸りけり。

地藏めぐり道行　下之卷

二上り相ノ山　夢に見て現に逢うて。幻に立つ甲斐。もなき妹背鳥。合 つがひ離れて。跡や先。しやれた。振袖加賀笠に紅絹の紆紐。抱帶若紫の ナホスフシ お染こそ。上の空なる。薄化粧。こましやくれたる取成を。君に見せばやつくり木

の。いく久松と云ひ交し。長地忍び〳〵の寢油をとけてぬる夜の數積り神に事寄せ今日は又。地藏めぐりに託けて。春の道草爰そこと。フシ人なき〳〵道は。手を引きつフシ一人託ちて。行くの道。二人が仲の災難も。又は天滿も遠ざかり。今日は心もよしはらの。無常の煙立昇り。小オクリ西と〳〵東へ國分寺。突出す鐘の三つ頭。フシ數へながらも伏拜み。賴む誓や法の舟。洩さで濟ふ網島に。かゝる鯉鮒市立てゝ。二番に立てるフシ大長寺信心深く行く先に。見返る人も在原の。本フシ當世男千鳥足。ちりぬれそめて忍ひもせず。はや京橋を打渡り番場を見れば〳〵氣も晴れて心も晴れて。廣小路。彌陀正覺寺有難や。スエテ庭に作れる梅が枝に。鶯來鳴くしをらしや。フシ本尊かけたる二世かけて。變らぬ仲の羨まし。ナウあれを見や數々の。鳥も戀する色かせぐ。楷々に。飛びつれて羽と羽とを合せては。フシ今やあふむの床の內。ダ・キ何うぞ鳥といふも有り。扨も聞えぬ時鳥。フシ泣いて明せし。クキユリ涙には。石の枕も朽ちぬべし。此方ばかりに思へとはいつそ死ねとの兼言か。僞多き人故に。あたら此身をつくし舟あこがれ。こがれ今日の今。人目も恥ぢず迷ひくる。それぢや。〳〵。先づそれぢやいの。それアダルすいた御心中。儘ならぬ身をかこち草。露よ。時雨よ染樣と泣いつ笑うつ取亂しナホスフシ思ひ直して顏と顏。色の緋櫻。燃え出でてほやけ地藏の慈悲厚く。直ぐに急けば天王寺。五番の札所フシ是とかや。逆緣ながら六番は。遙か戌亥の法善寺。スエテ是より拜し奉る。地南無歸命頂禮地藏尊。地藏歌哀れ拙き我等かな知らずば扨もやみぬべき。既に此理を辨へて後世をば恐れぬはかなさよ。婆婆にて慈悲の名號を一たび唱ふる功力にて。業にひかるゝ魂魄を導き給へ地藏尊。ナホスフシ所願を。爰に打納む。道頓堀の果て太鼓。いざ生玉の借り座敷。うさを語らんこなたへと。心いそ〳〵フシちよこ〳〵と。八幡宮の右左。爰へ爰へと招かれて入日の影と諸共に。おくそこもなし人もなし。誰もないぞと伊豫簾二人が姿木隱の床机に。夢をや結ぶらん。フシけに大阪の。東山。千代を數へて生玉の。社は殊に春めきて。常磐に見えし萬歳も。能も放下もわつさりとフシ聲若やかに立渡る。地セお染は跡を振返りコレ〳〵久松あれを見や。調アノ看板の書付に。お染久松祭文とは。地餘所にも丁度同じ名があれば有るものさりながら不思議な事と立止る。久松は打笑ひ廣い世界に同じ名も。同じ戀路もあるべきが歌に歌ふはこちとより。切ない事があ

るであろ。ござんせちよつと聞きませう。如何にもおれもさう思ふ餘所の久松器量さへ。そなたにちつと似たならば。餘所のお染もてつきりと。フシ惚れたであろともたすれば。地色成程餘所の久松はわしより鼻が高いけな。餘所のお染に此樣な。靨は無いと戯れて立寄り聞けば錫杖の。聲無常めく祭文に祭文へ所は都の東堀。聞いて鬼門の角屋敷。瓦屋橋とや油屋の。獨娘にお染とて。心も花のナ色ざかりのオクリ年は一八の細眉に。ナホスフシ内の子飼の久松が。太夫地二人はは つと走り退き。木蔭に顏を突合せ此身の上を何者か。爰へ持て來て歌はすとそなたは心が付いたかや詞おれが思ふはとと樣の昨日の樣におつしやつても。思ひ切りそに見えぬ故戀が募れば此樣に。地口にかゝるといふ事を人頼して御意見の。廻者ではあるまいか詞イヽヤさうではござんすまい。こちとにさへも打明けぬ深い旦那の御心で。出所の沙汰には成されぬ筈。こりやお袋の才覺で。浮名が立たば緣組の先から變改するであろ。そこでは私とお前とを。地女夫にせうといふ事ぢやと仇頼なる早合點。フシ又も輩簀に立寄れば。祭文へこなた嫁入嬉しかろ。わしは生きても死んでもぢや。たとへどのよに云はしやろと。誠があらば緣付は。ナホスフシなされぬ筈と云ひければ。地アレ聞かしやんせお染樣わしが心の恨をば。云はねど知つてお前をば不心中なと云ひはやす他人の口の恥しと。フシくねり掛れる女郎花。地色お染は顏を打赫め。そなたの心を知るからはおれが思うてゐる事も定めて知つて云ふであろ。この跡聞いて其上で惡くば詫言せうわいのと耳を寄すれば祭文は。今が衰れの最中と。スエテ語るも聞くも涙なり。祭文へ勿體ない事何として。お主樣をばわしが手にかけられましよと云ひければ。お染涙にくれながら。何の我身の。殺しやろぞ。跡を頼むといふ聲も。ナホス地南無阿彌陀佛と諸共にスエテ終に自害し果てにけり。太夫地二人は興も覺め果てゝ軈てかしこへ立隱れ。顏見合せてうつかりとさりとは何といふ事ぞ。此身は爰に息災で連歩くのにまざ〳〵しい。嘘つくとても事による。年の始にいま〳〵しい人目憂目も思はれぬ。往て强請らうか喚こかと。うろ〳〵せしが久松は。地心を鎭め小聲になり。詞いや申しお染樣。あの者どもが云ふ事を。嘘と思へば嘘なれど誠に聞けば皆誠。お前とわしが身の上をよう思案して見ますれば。不思議な事ぢやござんせぬ。叶はぬ事をくど〳〵と御苦勞かけに物詣。地色神や佛のお心にとても死なねばならぬ身と。人に教へて行末

を知らしめ給ふと合點すりや。長くも生きぬ此命最早死んだも同然と。思ひながらもがつくりと手足もなえて悲しやと。スエテ どうど坐つて泣出せば。地 お染もわつと聲を上げ實にもはかなき我々かな。命はいつを知らねども此大坂に幾人か。今迄心中多けれど死なぬ先から此樣に。唄繪草紙に載せらるゝわが亡き跡をわが聞いて。泣くと云ふのは古も。フシ 又後の世もよもあらじ。地色 たとへ心中するとても跡に心は殘らねど。おいとしいのは母樣のとつつおいつも苦になされ。お氣の短い父樣へ此事知れぬ樣にとて。蔭へなり又日向へなり。御意見あるも聲低う。涙交らぬ事はなし我はいかつな口答。詰る所は死にますと。いぶりを出せば氣遣うて夜着に卷かれて寢ずの番。憂き苦勞をばさせませし親の罰でも行末の。よからう樣には思はれずよしは死んでも添ふ事が。なればよけれどあの世をば見た人もなし言傳が屆くも知らぬ片便宜。心元なき冥途やと。久松に抱付きフシ身を寄り。伏して泣き惑ふ。詞ヲヲ御尤先の世は。私とても知らねども。折折旦那の御供して。談義の上で聞きました成程地獄も佛も有る。大きな蓮華の其上に女夫〳〵は並び居て。寒い悲しい事も無う千百年も居るけなが。地 二つ取には此世にてせめて一年半年でも。主よ女房と云ひ云はれ所帶とやらがして見たい。百萬石の大坂に身の置所なき樣に。心苦しい我々が憂をばせめて忘れうと。爰へ來たれば此憂目聞けばとにかく死神の。行く先々へ付廻り。催促するか責むるのか。最早宮へも參るまい スエテ 歸りませうと手を取れど。地色 お染は更に立上らず。出にくい內をぬけ隱れ。又戻つては色々の辛い事をば聞くであろ。いつその事の出ついでに。日は暮れようとも明くるとも浮れ歩くかさもなくば。連れて退く氣はないかいの。詞アヽ扨叶はぬ事ばかり。行く所ありや何時ぞやの折にどこへも退きまする。お袋樣の下されし命を延ぶる妙藥の。金とてもなし知るべはなし。地 死ぬる時節を待たうより外に思案はござらぬと。互に袖を取交し。立ちては泣いつ居ては泣きフシ泣くや涙のきぬ〴〵の。フシ 別れをつぐる。鳥ならで。實突く寺の鐘の君に。身はかけろふの有りやなし。胡蝶の夢と覺めはてゝ。宮居と見しは本來の。空に歸るや石の火の。光乏しき油屋の我住む內とへなりにけり。

地色 帳場に眠る久松はむく〳〵と起上り。胸押しさすり息をつぎあたりほとりを見廻して夢は夢ぢやが現にも俤は猶忘られず。お染樣はどこにぞい悲しい事を

見ましたと。語りもしたし顔ばせも今日又見ねば懐しと。人に心をおくの間の障子を戀の八重垣に。妻や籠れる久松も。爰にいるさの月影に。横雲かゝるばかりにてフシ立ち煩うてゐる所へ。地色山が屋よりも呼使五郎八は走り來て。詞旦那様お家様お染様をば連れまして。お早うお出なされませ。相伴衆は待ち兼ねて汁や煮物の加減さへ。地違ひまするとと追々に呼びにぞきその山が屋の。フシ使は早く歸りけり。地色太郎兵衛夫婦立出でて日がたけたものさうであろ。娘は着物着替へたかお染。お染とせはしなう呼び立てられてあい〳〵と。明くる障子の髪形取繕はず何事を。泣き眼したる目元して。詞かゝ様わしは往きますまい。假寢の夢に忌はしい辛さにいかう泣いた故。地今につぶりがふらついて。どうも起きて居られぬと顔差入るゝ襟の下。そつと覗けば久松も同じ夢みた顔形フシ云はねど。胸に應へけり。地色母も心にかかれども。笑顔作つてホ、〳〵〳〵。詞

山が屋の振舞はこちとは假令そなたをば。呼びたいからの造作をば行かぬと云ふも愛想ない。地ちつとの間往てつい戻りやいざやと云へば太郎兵衛は。詞ソレ〳〵。母がいふ通りおぬし一人が正客で。れつきとしたる二親は御機嫌取りの太鼓持。地指の股でも廣げうに兎角心をわつさりと。持つが物事目出度いの。燒物燒鳥取分けて。料理は自慢たら汁と勇オクリみ〳〵賺して行く跡の。變身は何と。地久松は。常磐にあらぬ常磐木と。フシをかしい事をいふ人かな。夢は逆夢どの樣な悲しい事でも此母が。判じ直してよい樣に目出度う解いてやりませう。今日變らぬものは涙なり。フシ春の日かけは。明けき。折知り顔に梅の花。ありとや爰に鶯の鳴音は月日ほし蕪菁。年頭歳暮の御

禮をば一荷に荷ふ藥奢は。野崎村の久作が ヲシ 物もうとこそ言ひ入るゝ。久松は立出でて。詞ハア親父様ござつたか。今日は屋内が振舞にお出なされて誰もなない。地こちへ這入つて草鞋の。紐も解く解くお休みと オクリ 連れ立ちへ内に入りにけり。地色久作きよろ〳〵見廻して。御夫婦共に留守さうな。詞見ればお上に錢箱や懸硯など引散し。和御寮一人に留守させて。出歩かるゝはよく〳〵に。奉公振がよいものと。嬉しい〳〵さりながら。おれも今年は六十二。何時まで田畑せゝつても切れ變つたる果報をば。掘出さうとも思はぬ故おぬしに世をば打任せ一枚敷でも取圍ひ。寢起を樂にせう爲に隣の茂四郎が狡猾者。おくめを嫁に貰うて置く。地色おぬしが暇も貰ひに來た旦那へ禮は付けたりと。落着顏に言出す久松はぎよつとして。詞成程さうもござらうが。わしが年季はまだ三年是から先が御奉公。留守も預り外向の御用にも立つ最中に。地そんな事をば云はしやつたら旦那が腹立致されう。お留守の内に歸らしやれ ヲシ 早う〳〵とせりかくる。地色久作は打笑ひ。詞イヤ〳〵そこは氣遣すな。緣故や其身の浮むには。どつこの山椒太夫でも悅び暇をくれるもの。地旦那に云ふと早速に暇は拠置き着おろしの。袴肩衣貰うて見しよ。久松は氣色を變へ。如何にこなたが文盲な土百姓でも相應の。義理と法とは立てるもの。七ツの年に内方へ連れられて來て正眞の。西も東も知らぬ内御夫婦様の世話になり。手習算盤其間に四書の素讀も習はして。今獨食する迄は親より深き御恩をば。禮奉公とも云はずして年季の内に出られうか。旦那は合點しられてもわしが去なぬと云放す。久作側へ差寄つて。詞親方殿のお蔭にて物讀もした證やら。さつぱりとした挨拶の。道筋立つて面白い。おれは無筆の明盲何の差別も知らぬ故。主の娘を勾引して淫奔かはく學問は。地尙かし聞きも習はぬと睨付けられて久松は。詞ソリヤまあ何をおつしやると。地云はせも果てずヤア諍ふまい〳〵。詞おのれが身持の有りたけの底を叩いて法印に。皆たつた今聞いて來た。扨々汝は憎い奴。一人の親に差向ひよう惡口をぬかしたなあ。地土百姓はするけれど子を盜人には產付けぬ。恥を思はゞ其儘に在所へ逃げてはなぜ戻らぬ。主に憎まれ傍輩に汚れた頰を押拭ひ。娘御寮やお袋の機嫌を取つて此家の。跡してやらう慾心か。詞品に依つたら其樣な首尾にも若しはなつた時。打擲した父御前は。結句諦めもよからうは。最眞召さるゝ母殿の心の内には汝めが。地喉のあたりへ喰ひ付こか。刃物を

持つて身の内をば。切りさいなんても棄てたかろ。詞なれ共こちらを痛めれば。あちらのわちよがあたけ出し。地死のの生きよのに持餘し花香もあらぬ祝言に。隣あたりへ歴々の婿や勇の通るのを見る度毎にくし〳〵と。娘一人をむざ〳〵と棒に振つたは久松の。犬め故ぢやと果てしなく。一生睨み付けられば金の中から目見出すと。何が手柄に成る事ぞ。詞アノ法印めが事を見よ。兄弟なれどおれよりは智惠も器量も勝つたと。二親達が自慢して武士の養子にやられたが。それも仕遂げず今は又。あぢな商賣目論んで。上下小袖ひつ違へ衣の肩はいかれども。地おうた門をばひそ〳〵と肩身すぼめて通るけな。地色其内證の苦しさは思ひ遣るさへ。笑止なり。在所住ひの氣散じは腰を屈める相手もなく。惡所すゝめる友もなし榮耀喰こそ不自由なれ。乏しい月日はつひにない。人間一生安樂な親の家をば讓るのを。厭とぬかすか勘當りめ。地詞其性根とは知らずして此冷たいにおれを見よ。素足で居れどおのれめに穿かさう爲に此足袋を。地持つて來たのが悔しいと振上げ〳〵七ツ八ツ。さん〴〵に叩き伏せさあ無念なか。口惜しいか。詞親の叩くは慈悲の杖。主の打つたは憎しみの。杖をしたゝか受けたけな。地親子二人と分つても木に聲へれば子は枝よ。枝を叩けば木の親に當つて苦しいとスしやくり上げたる。久作が胸の。内こそせつなけれ。地色道理に迫る久松は。親の顏をば打守り。とかう答へもあらばこそ浮世の中に我程な。不幸な者はあるまいと フシ せき上げ〳〵泣き居たり。詞久作愈々腹を立て。不幸と自身知つてゐる人でなしには手がつかぬ。地色子と思なく言捨てゝ立たんとするを久松は。裾に取付き引止め。詞我と不幸と申すこそ。地背くまいとの詫事ぢやさりとは赦して下されと。手を合すれば久作は。詞ヲヽそれで我子よ可愛子と。地引寄せ〳〵撫で摩り フシ 乳も呑ませたき氣色なり。地色稍あつて立上り思へば留守へ入込んで。惡智惠などを付けたかと親方殿に思はれては。暇を願ふ邪魔になる平野町迄往て來るぞ。着類半がへ取りおかば篤と我物人の物。見分けて雪駄片足でも。さもしいなどと云はれなと急いで出でしが何とやら。心がゝりてうぢ〳〵と又立戻り。コレヤ久松。詞なんぼ悲しい事にても。三日四日の水離れ。宿のおくめが縮髪。地見てや止みなん葛城の ナクリ つらきへ別と フシ 後ぞ知る。地色久松は只うつかりと夢と現の悲しさは。思ひ比べて思案して。見れば見る程どうしても。

死なねばならぬ身の上を。二つ取には諸共に。死んだ夢こそ増ならめ。　覺めて悔しと泣き惑ひ。　地色　兎角する間に人や來人親や戻りて此上の。憂目や見んと急がはしく。硯と紙を持ちながら　ワキ　心の〈闇路暗きより。フシ　藏の窓こそ。極樂の。東門なりと伏拜み。佛樣よりお染樣姿婆のお顏を今一度。見たやと思ふ一筋に。心や行きて誘ひけん。　地色　お染はひとり駈戻れば。久松慾より顏出して。　詞　もう私は覺悟して只今爰で死にま。する。ヲ、さうであろ〳〵。　地色　我も假睡の夢の內心中したと思うたは。神や佛の御導それを語つて諸共に。死なうと思ひ極めて來た。なぜ藏の戸を明けやらぬぞ。　詞　イエ〳〵爰へござんすな。二世とは云へど親達の許さぬ內に御一所に。　地　死ぬればわしは主殺しあひも變らぬ夢の內。云ふ事聞く事語る事皆盡果てゝ魂は。連れて冥途へ往たであろ今の身體は空蟬の。空しき此世を恨みても。泣いても最早歸らぬ事さらば〳〵といふ聲も心もさすが細引を。首にくる〳〵ひん卷けば。お染も何の後れうと。剃刀出して忽に紅流すみつせ川。　地　冥途の坂に久松も哀と消ゆる春の雪。白きを見れば死顏の一つ蓮の生如來。さかさま事の弔ひに死光する燈火や。お手の物なる油屋と。樽にしるして國々の。其國々の果迄も言の。葉草となりにけり。

右之本遂吟覽頌句音節墨譜等不違毫釐
令加筆且以著述之全本令校合畢尤可爲
正本也

豐竹上野少掾　印

作者　紀海音

大阪上久寶寺町三丁目
正本屋　西澤九左衞門版　印